

弥生時代の東北地方

須 藤 隆

はじめに

東北地方の弥生時代研究は、近年目覚ましい進展をとげている。ことに、この地方の弥生文化の解明とともに、それを支えた農耕社会、稻作を基軸とする農耕のあり方について、集落や墓、水田、水路の跡、木製農耕具、石器、栽培植物などの資料が数多く確保されるようになり、その内容の解明が着実に進展している。

東北地方の弥生文化研究は、1919年に長谷部言人と山内清男によって調査された宮城県多賀城市柳形圓貝塚出土資料における粗圧痕土器の発見（山内1925）をその鏑矢とする。そして、その後、伊東信雄がこの分野の研究に本格的に取り組むようになって、東北地方における弥生文化と初期農耕社会解明の研究が軌道にのることとなった（伊東1950a）。

「東北考古学」の基礎を築いた伊東信雄は、先史時代から古代まで幅ひろく、様々な課題の研究に取り組んだが、弥生時代についても精力的に研究を進めた。これは、東北地方の歴史においても、この時代が稻作農耕社会の胎動するきわめて重要な時代であるという洞察にもとづいたものである。

伊東は、1931年頃、東北大学に寄託された久原コレクションの整理を進めるなかで、青森県田舎館村垂柳遺跡出土の「田舎館式土器」を詳細に観察し、この土器に東海地方の弥生土器との類似性を認めた。この認識がその後の伊東の弥生文化研究の出発点となった。

さらに、1939年から41年にかけて、仙台市南小泉遺跡において、膨大な量の弥生土器、石器が出土した。伊東は、その資料を丹念に収集し、研究することで、東北地方の弥生文化の実態をはじめて具体的に示した（伊東1950b、60）。

以後、伊東は、東北地方における重要な弥生遺跡を数多く調査し、その文化内容、生業活動の解明に本格的に取り組むことになった。1947年には、北上川下流域の登米郡中田町上沼遺跡の調査で、東北地方における最古の弥生土器を発見し、「大泉式土器」という型式名を設定した（伊東1955、1957）。

1953年には、水沢市常盤遺跡において弥生後期の合せ口土器棺、および竪穴住居跡を精査し、東北地方ではじめて弥生時代の墓と住居について、その具体的内容を明らかにした（伊東1954）。そして、1957年に、秋田県南秋田郡琴浜村志藤沢遺跡を半田市太郎と共同で調査し、東北北部の日本海側における弥生土器－志藤沢土器－を明らかにし、それに伴う

2 弥生時代の東北地方

糊圧痕土器を確認した（伊東1960）。この研究で、男鹿半島においてもこの時代にすでに初期農耕文化が受容され、稻作が営まれていたことを指摘した。

さらに翌年、岩手県花泉町中神遺跡を調査し（伊東1974）、多量の大泉式土器とその共伴遺物を確保し、東北地方の弥生土器編年の解明を進めた。同じ年、青森県田舎館村垂柳遺跡を調査し（伊東1960）、津軽地方における農耕と弥生文化の発達を明らかにするという画期的な成果をあげた。

その後、1962年に塩竈市崎山廻洞窟（伊藤1965）、1965年には一迫町山王廻遺跡（伊東・須藤1985）、1966年に青森県下北郡大畑町二枚橋遺跡（須藤1970）、1969年に青森県脇野沢村瀬野遺跡（伊東・須藤1982）、福島県郡山市福良沢遺跡（伊東・須藤他1971）を調査し、さらに、1970年には、福島県郡山市柏山遺跡（伊東・須藤他1972）を調査するなど、次々と標識的な弥生遺跡の調査を実施した。これらの調査と研究によって、

- (1) 東北地方の弥生文化の内容
- (2) 東北地方の弥生土器の型式編年と地域性
- (3) 東北地方における弥生稻作の実態とその北進

といった課題の解明が進んだ。その後、東北地方における多くの研究者が弥生時代の研究に取り組み、今日の研究の発展、興隆をもたらした。

1. 地域区分と土器型式の編年

a. 地域区分

ここでは、東北地方の弥生時代の地域区分と時期区分にふれておきたい。東北地方は、阿武隈川、北上川、最上川、雄物川、岩木川のように主として脊稜山脈にそって南北に開析する河川と、阿賀川、名取川、米代川、馬淵川など、東西に開析する大きな河川がその地理的環境を形成しており、その地形はきわめて複雑なまとまりをみせている。

このような水系を基本とする地理学、生態学的視座と土器型式の地域性といった考古学的視座から、この地方を次の3地域に大きく区分することができ、その中を、さらに地形のまとまり、遺跡のあり方にもとづいて、小地域に区分することができる。

- (1) 東北地方北部：①津軽地方、②馬淵川流域、③陸奥湾沿岸、④下北半島、⑤米代川流域など
- (2) 東北地方中部：①雄物川流域、②北上川流域、③仙台平野・阿武隈川下流域、④最上川流域など
- (3) 東北地方南部：①いわき・相馬海岸地方、②阿武隈川中・上流域、③会津地方など

東北地方北部				
時期		津軽地方	下北・八戸	米代川流域
弥生	I	砂沢、宇田野(2)、五輪野		是川中居、剣吉、松石橋、八幡、畠内、金田一川
	II a	砂沢、五所、神明町		二枚橋、瀬野、大石平、風張 2、足沢
	II b			馬門
	III	井沢、田舎館1、宇鉄2		表館II
	IV a	田舎館2、田舎館3		
	IV b			念仏間、弥栄平
	V			大石平、上尾駒2
	VI	鳥海山		千歳、上尾駒2、足沢
				猿ヶ平I、大岱I・III

東北地方中部					
時期		雄物川水系	北上川・北上山系	仙台平野	最上川水系
弥生	I	地蔵田B、狸崎A	大日向II、山王IV上 中神	十三塚、飯野坂山居	生石2、蟹沢、上竹野
	II a	地蔵田B、湯沢A、 横長根A	馬場野II、谷起島、中 神、湯舟沢、青木畑	福浦島下層、カラト塚	蟹沢、松留、石田A
	II b	横長根A、志藤沢、 手取清水	山王III、中神、谷起島、 湯舟沢、上村貝塚	福浦島、寺下団、原、 長岫	蟹沢、地蔵池、生石 2
	III	手取清水、宇津ノ台	谷起島、寺下団貝塚	船渡前、原、富沢（泉 崎前）	蟹沢、地蔵池、松留
	IV	宇津ノ台	山王団、橋本、境目A	辯形団、南小泉、高田 B、中在家南、富沢	
	V		境目A	十三塚、崎山団、山口、 下ノ内浦	
	VI		湯舟沢、上ノ原、宮沢		

東北地方南部				
時期		磐城・相馬海岸	阿武隈川水系	阿賀野川水系
弥生	I	作B、荒田目砂畠	根古屋、薬師堂	墓料
	II a	成田、岩下A	鱸沼、鳥内、根古屋、御代田	墓料
	II b	岩下A	鱸沼、鳥内	
	III a		鱸沼、孫六橋、鳥内	南御山I、墓料、宮崎
	III b	龍門寺	滝ノ森	
	IV a		柏山	南御山II、(六ノ瀬)
	IV b	桜井	円田、柏山	一ノ堰B
	V	桜井、天神原	福良沢、陣場	川原町口
	VI	伊勢林、輪山、八幡台	天王山、明戸	館ノ内

表1 東北地方における弥生土器の型式変遷と基準資料出土遺跡

b. 時期区分

東北地方の弥生文化の時期区分は、土器型式の変遷から、前期、中期、後期の3期に区分できる。この時期区分は、関東、北陸地方など他の地方との対比を可能とする。特に前期の内容が、最近の研究でより詳細に明らかにされている。土器型式の変遷では、1期から6期までの編年を行ない、さらに2、3、4期については、古段階と新段階のa、b期に区分できる地域も認められる。現在、1、2期を前期に、3、4、5期を中期に位置づけている。第1表には確定している型式名（砂沢式、五所式、田舎館1、2、3など）と基準となりうる資料がえられている遺跡名（宇田野2、剣吉荒町、中神など）を掲げている。この表は土器型式の同時性から地域間の文化、社会の交流、結びつきを考える場合の主要な目安となる（表1）。

2. 東北地方における弥生文化の受容

a. 足沢遺跡の遠賀川式土器

次に、この10年程の間に明らかにされた遠賀川系土器の分布と内容、それと連動する東北地方の前期弥生土器、弥生文化の成立についてふれることとしたい。最近の研究で北九州の「遠賀川式土器」（小林1933）や近畿地方の「遠賀川系土器」（藤沢・小林1934、小林1934）が、東北地方に広く分布していることが明らかになってきた（図1）。

1955年、岩手県二戸市において、山内清男が足沢遺跡の発掘調査を行なった。遺跡は馬淵川・安比川流域に広がる標高300～400mの二戸高原を流れる十文字川の最上流域にある。調査の結果、遺物包含層から層位的に縄文時代晩期5期の大洞A式から弥生時代後期の6期（天王山式併行式

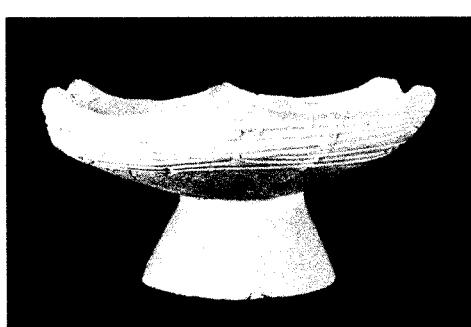


図3 岩手県足沢遺跡出土晩期終末の高杯



図2 遠賀川式土器と遠賀川系土器（1. 砂沢 2. 足沢 3. 中神）

富な資料がえられた。この包含層出土土器の主体は晩期終末6期（大洞A'式期）の土器である。

この資料を東北大学考古学研究室で分析した結果、北九州の「遠賀川式土器」が含まれていることが明らかにされた。この土器（図1-10、2-2）は、推定器高15cm程の小型

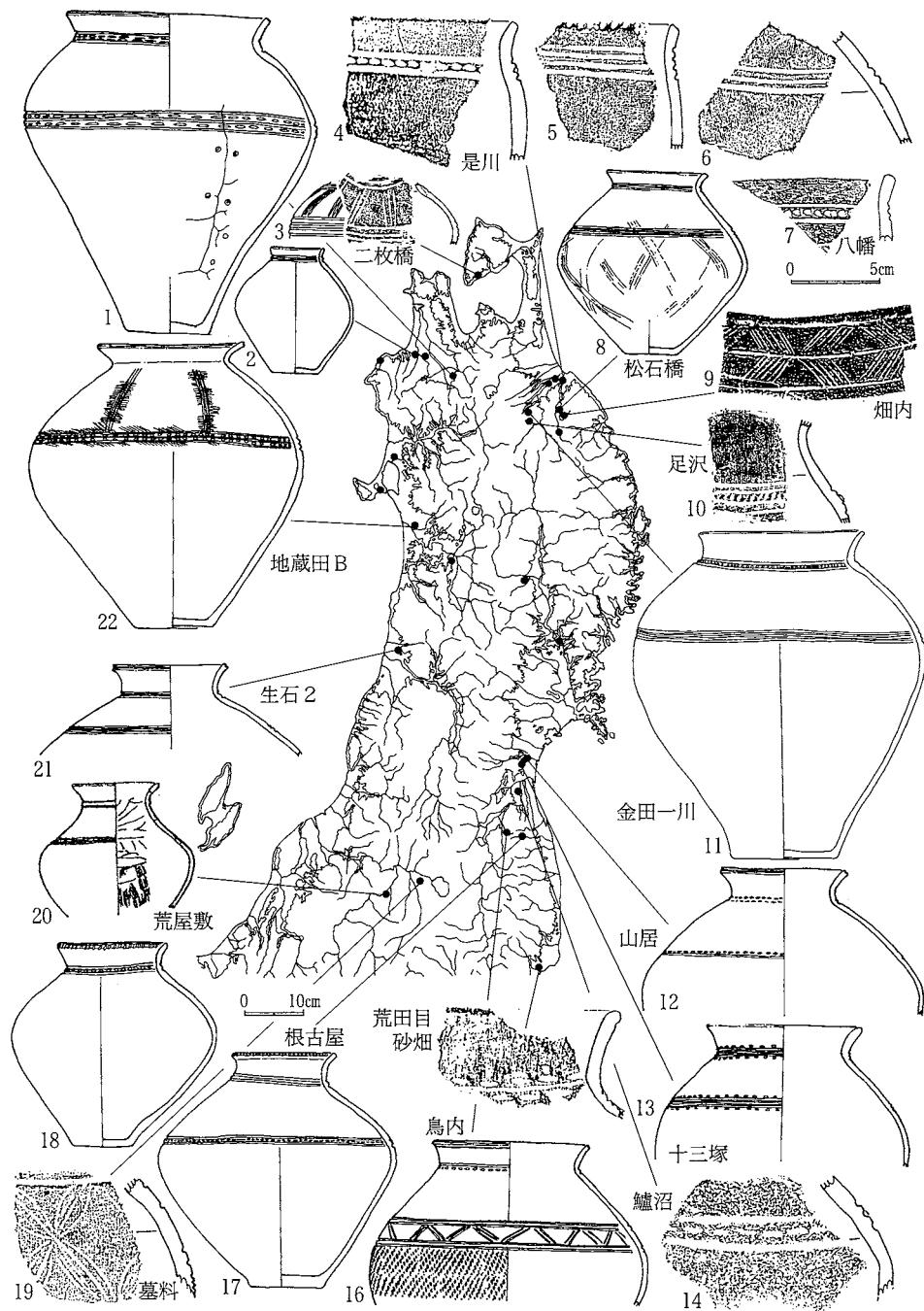


図1 東北地方出土遠賀川系土器と出土遺跡

壺で、肩部に平行線が4条めぐり、2条の沈線の間に短い斜線が細かく充填され、さらに、丁寧にヘラ磨きされている。その型式的特徴から、板付IIa式に属する土器であることが確認された。この土器は遠く北九州から馬淵川上流域まで運ばれた土器であり、出土層を入念に検討した結果、晩期6期の大洞A'式（図3）に共伴するものと判断された（須藤他1999）。

さらに、福島県三島町荒屋敷遺跡では、足沢出土資料とほぼ同時期の頸部に突帶のめぐる中型壺（図1-20）が出土している（中村他1998）。この資料は、近畿地方の第I様式古段階の土器（佐原1968）に相当し、近畿、北陸地方から阿賀野川・只見川上流域に搬入された遠賀川系土器とみられる。また、会津若松市墓料遺跡では再葬墓から、木葉状文をもつ小型壺の土器片（図1-19）が出土している。これは、近畿地方の第I様式新段階の土器に相当し、やはり搬入土器と推定される。

これらの搬入土器は、弥生時代前期の東北地方と西日本との間の物資、人、土器作りや石器作り、稲作に関わる技術、知識といった様々な文化要素、情報の授受、盛んな文化交流を示す重要な資料である。

b. 遠賀川系土器3つの類型

北九州から拡散した西日本の前期弥生土器は、かつて西志賀貝塚出土資料を検討した小林行雄によって、「遠賀川系土器」と概念づけられた（藤沢・小林前掲）。近年、この遠賀川系土器を出土する遺跡が東北地方各地で次々と明らかにされ、現在、30箇所を超す遺跡が確認されている。足沢資料のように、北九州から搬入された遠賀川式土器とともに、近畿、北陸、中国地方の日本海側、あるいは伊勢湾地方などから運ばれてきた遠賀式系土器が多数分布している。この遠賀川系土器には、様々な変異があるが、基本的には次の3つの類型がみられる。

I. 搬入型遠賀川系土器

青森県三戸郡南郷村松石橋の広口壺（図1-8、市川他1984）、畑内の有軸羽状文をもつ



図4 宮城県名取市十三塚出土遠賀川系壺

大型壺（同図7、三橋他1997）、青森県弘前市砂沢の糊痕壺（須藤1998）と甕（図2-1）、会津若松市墓料の木葉状文小型壺（図1-19）、八戸市是川中居の壺と甕（同図4～6）などが知られている。この搬入土器の確認は、技術面、意匠構成などの検討とともに、胎土分析による検討（清水1988）が有効である。

II. 技術導入型遠賀川系土器

青森県三戸郡名川町剣吉荒町の広口壺（工藤他1984）、岩手県二戸市上斗米金田一川の大型壺（同図11）、軽米町大日向Ⅱ出土の壺（田鎖他1995）、秋田市地蔵田Bの土器棺群（同図22）、名取市山居（同図12）、十三塚の壺（同図13、図4）、福島県伊達郡鹽山村根古屋再葬墓の壺と鉢（同図17、18）など、多数の資料が知られている。西日本の弥生前期の土器製作技術が受容され、その技術で東北地方において製作された土器である。しばしば形態に微妙な変容が認められる。胎土は在地の粘土であり、産地を確認する必要がある。根古屋2号土墳出土の遠賀川系土器は、装飾、施文、調整手法は西日本の特徴をよく示しているが、胎土には黒雲母が多数混和されており、在地の土器と共に通する。

III. 折衷型遠賀川系土器

福島県石川郡石川町鳥内（柴田他1998）出土の壺（同図16）、宮城県角田市鱸沼出土壺（同図14）、秋田県大曲市宇津台の大型壺、八戸市是川中居出土の甕などは、体部の刷毛目調整を行なった後に縄文を施すなど、それぞれの地域における伝統的土器作り技術と西日本の前期弥生土器の製作技術が複合した型式である。主要文様帯に展開する文様意匠には、盛んに西日本の装飾意匠と縄文施文など在地の伝統的装飾要素が併用される。このように、東北地方では前期前半の弥生文化成立期に、西日本の前期弥生土器の製作技術を盛んに受容したことがうかがえる。

そして、これらの遠賀川系土器群では、八戸市是川や砂沢、生石2遺跡出土資料にみられるように、遠賀川系の壺とともに、煮沸形態である平坦口縁で、外彎する口頸部をもつ甕が導入され、折衷型の甕を生み出している。この時期の土器の器種構成の変化は、弥生農耕文化の受容当初から農耕民の生活様式そのものが、西日本から東北地方へ取り込まれたことを明確に示している。

また、これらの搬入型、技術導入型遠賀川系土器の大半は、砂沢、生石2遺跡出土資料、金田一川遺跡の合せ口土器棺などにみられる共伴関係から、砂沢式土器に伴うことがほぼ確定している。また、北九州産と推定される足沢資料が晩期終末の6期に属すると考えられることから、弥生文化の受容の始まりは、晩期終末の大洞A'式期に確實に遡ることが明らかになった。

なお、折衷型遠賀川系土器は、地蔵田B、鳥内、宇津ノ台、鱸沼遺跡出土資料のように、前期後半から前期終末まで長期にわたるものであり、変容の多様性がみられる。

このような遠賀川系土器の東北地方における分布の状況は、稻作を基調とする弥生農耕と弥生文化の拡散と受容、農耕社会の形成過程を明らかにする上で重要な手掛りと言える。

3. 弥生文化の変遷と地域性

a. 前期弥生文化

1988年、岩木山東麓にある弘前市砂沢遺跡において、前期の弥生水田跡6枚が検出された。この水田跡は、それぞれ75~205m²の面積をもち、比較的大きな規模の畦畔区画が設けられている。水田跡を覆う包含層から砂沢式期の遺物が多量に出土したことから、この水田は前期の砂沢式期に営まれたものであることが確定した（村越他1991）。

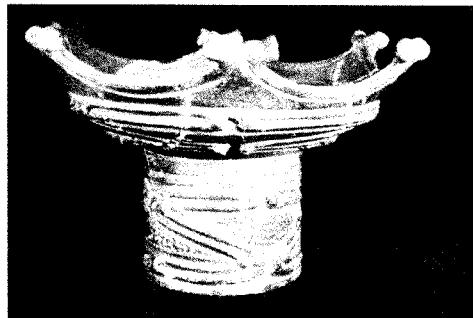


図5 青森県弘前市砂沢遺跡出土高坏

この遺跡から出土した砂沢式土器は、甕、深鉢、壺と蓋、鉢、高坏（図5）、注口土器と蓋で構成されている（須藤1998）。甕には、平坦で外反する口縁部をもつ遠賀川系甕が多量に共伴する。注口土器は蓋がセットになる（図6）。この型式の蓋は、1998年、山王廻遺跡の調査で、晚期後半の5c期の包含層から出土している（図7）。また、浮線渦巻文の短頸広口壺（図8）がこの蓋とセットになると考えられることから、砂沢式の蓋付き注口土器は、晚期後半の蓋付き短頸壺の伝統を受けたものとみられる。これまで、田舎館式期の蓋に代表される東北地方北半で知られていたこの型式の蓋は、その起源を亀ヶ岡文化のなかに求めることができる。なお、従来、広口壺とみられてきた浮線渦巻文土器は、注口土器である可能性がきわめて強いと考えている。

この時期に西日本からの前期弥生土器と在地の縄文土器の技術、装飾体系が盛んに複合し、新たな器種構成と土器作りの体系を生み出している。一方で高坏、鉢、壺といった装飾土器は、変形工字文のような伝統的意匠で飾られている。このような装飾的高杯、鉢の発達がこの時期の大きな特徴である。

また、水田稻作の導入によって、生業活動のあり方、その文化のシステムは大きな変貌をとげる。その変革は、足沢遺跡出土資料などの存在から、東北地方北部でもすでに晩期終末には胎動していたとみられる。

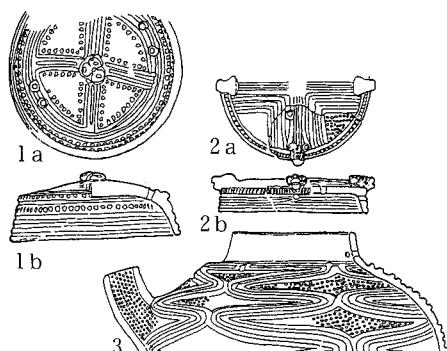


図6 青森県砂沢遺跡出土注口土器（3）と蓋（1、2）

1987年に、最上川下流域に広がる庄内平野の酒田市生石2遺跡で多量の前期弥生土器—生石2式土器—が出土した（安部1986）。この一括土器には、砂沢式の深鉢、変形工字文をもつ鉢や壺と、折衷型遠賀川系甕、搬入型とみられる遠賀川系壺（図1-21）が共伴した。

高坏は、砂沢式とは全く異なった特徴をもち、強い地域色をみせる。この資料で、砂沢式と遠賀川系土器との共伴関係、同時性が確定した。

東北地方における弥生文化の受容は、砂沢、地蔵田B、是川遺跡の前期資料にみられるように、それぞれの地域的特色を見せながら、局所的変化ではなく、基本的には津軽地方や八戸地方までをも含めた広い範囲で、ほぼ均質に展開した文化変容であると考えられる。

1919年に長谷部言人が調査した岩手県大船渡市大洞貝塚A'地点出土の基準資料には、型式の異なる高坏3点が認められる。それぞれ、大洞A式の新段階、大洞A'式、砂沢式に比定

できる3期の土器である（須藤1997）。東北地方中部においても、この資料にみられるように東北北部と同様に晩期後半から弥生前期前半にかけての土器型式の漸進的変遷が認められる。山王囲遺跡や中神遺跡調査資料の検討で、この型式変遷が確認されている（須藤同上、須藤他1997）。

b. 中期・後期弥生文化

中期になると、東北地方の農耕文化は目覚ましい発達をみせる。中期前半に、東北地方南部は関東地方の弥生農耕集団と盛んに交流し、強く連動した展開を示す。再葬墓が、関東地方と東北南半にまたがって広く発達するのも関東地方との結び付きの強さを裏づけている。しかし、中期中頃になると、東北地方の南、中、北部で明瞭な地域色を確立する。とりわけ土器の器種構成にそれぞれの地域性がよく現われている。また、東北北部は、独特の地域色を生み出しており、土器の器形、装飾意匠、施文手法は、北海道渡島半島の続

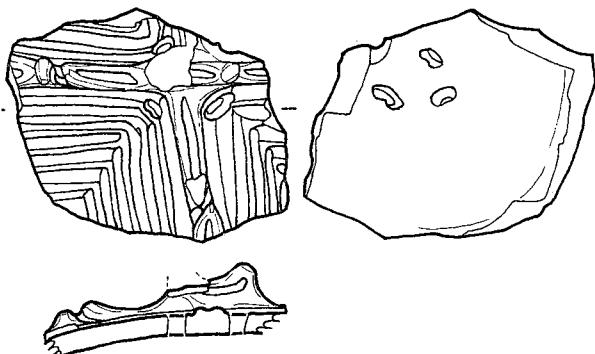


図7 宮城県一迫町山王囲遺跡Q区泥炭層地区10層出土蓋



図8 山王囲遺跡出土浮線渦巻文土器（注口土器？）

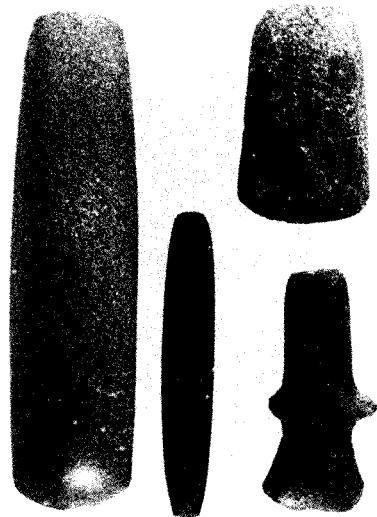
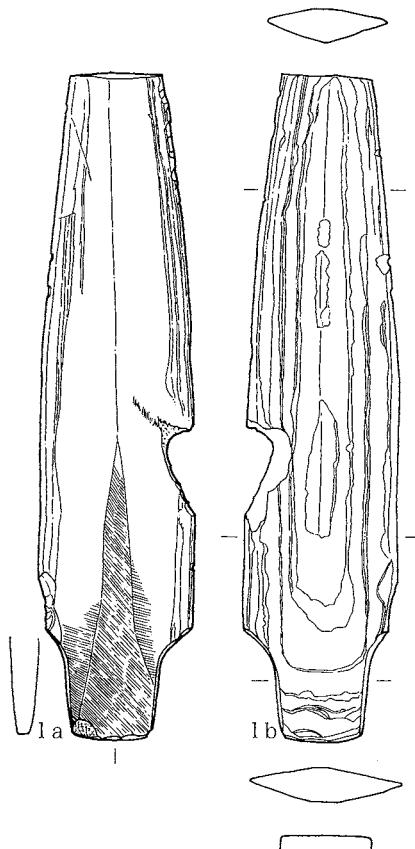


図9 仙台市南小泉遺跡出土弥生石器

縄文文化期の土器との間に強い共通性を示している。

中期を通じて東北南部、中部、北部の型式推移は相互によく連動している。ことに、中期前半には甕と粗製蓋、大型壺の発達、充填縄文手法の盛行といった動向が共通してみられ、装飾意匠にも、菱形文のように、共通した要素が各地で用いられるようになる。中期中頃になると、楕形式が中部に発達し、南部でもこれと著しく類似した土器型式が盛行する。他方、北部では2つの系統が共存する田舎館式が発達する(須藤1983)。これらの地域性の強い土器型式が、東北地方の中期弥生土器の代表的な型式である。

図10 宮城県丸森町河原田出土磨製石剣
(Scale 1 : 2)

さらに、仙台平野の中在家南遺跡、津軽平野の垂柳遺跡出土の木製農具をみると、近畿地方に分布する前期農耕具の形態、組み合わせ、製作技術の伝統をよく受け継ぐ一方で、鍬の基部飾りなどにみられるような地域色の強い木製農具が出現する。また、水路や水田の造営がきわめて計画的に行なわれ、農耕社会の安定した展開が認められる。石器では、縄文時代の伝統の強い打製石器が踏襲されるとともに、大陸系磨製石器が発達する。石庖丁、蛤刃石斧、扁平片刃石斧、鑿型石斧(図9)、磨製石劍(図10)、環状石斧などに加え、最近、柱状片刃石斧が仙台市高田B遺跡と名取市原遺跡で発見されており、弥生石器の器種構成と製作技術が、西日本の弥生社会からそのシステム全体で導入されたことが指摘される。

中期後半には、南半部では、充填縄文手法が姿を消し、平行線文土器が一貫的に発達する。また、北部では複雑な意匠と充填縄文土器手法のみられる土器が盛行する。そして、この頃、中部、南部

では石庖丁や蛤刃石斧など大陸系磨製石器の発達が著しい。

しかし、後期になると、天王山式土器などの土器型式が、東北地方全体に広く分布するようになり、器種構成、装飾体系ともに中期までの地域色豊かな土器型式のあり方とは大きな相違をみせる。器形、意匠に多様な変異をかかえながら、広い範囲で齊一的様相を確立する。東北地方の広い範囲で弥生社会の地域集団が相互に緊密な関係を繰り広げたとみられる。この後期の齊一化を基盤として、東北地方南部から中部にかけて、古墳時代前期に、きわめて齊一的な土師器、住居様式などを抱えた農耕社会が成立したとみられる。ことに、仙台平野などでは、名取川流域の南小泉遺跡、藤田新田遺跡（後藤他1994）や愛島丘陵の北原（小村田他1993）、宮下、今熊野遺跡（宮城県教育委員会1985）といった古墳時代前期の集落に活発な動きが認められる。

4. 弥生時代の集落

a. 弥生集落の構造

東北地方では、近年、大規模調査によって前期から中期前半にかけての弥生集落の構造が具体的に捉えられるようになってきた。なかでも、秋田市地蔵田B遺跡はきわめて重要な前期集落遺跡である（菅原他1986）。

この遺跡は、雄物川下流域の右岸段丘上にある。東北地方でははじめて居住域と墓域とともに明らかにされ、その変遷が検討されてきた（須藤1998）。この集落は東西長60m、南

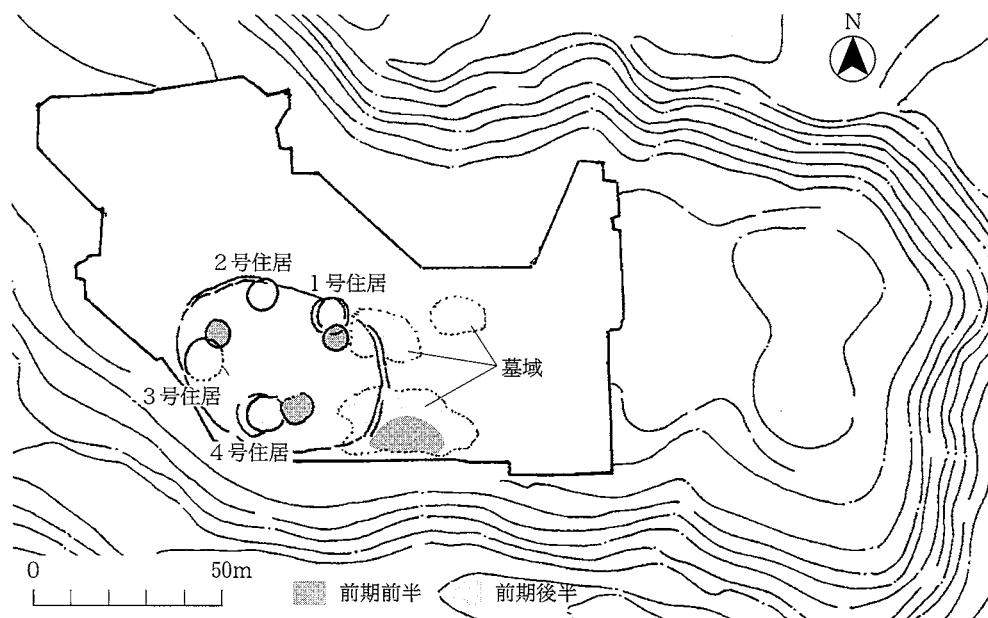


図11 秋田市地蔵田B遺跡の弥生前期集落変遷

北幅50m程の楕円形に柵木で囲まれている。柵木は2列で、四方に出入り口をもつ。柵木の中には、径20m程の広場を囲み、3～4棟の比較的規模の大きな竪穴住居が建ち並ぶ。住居は改修を繰り返し、前期前半から終末にかけて大きく2期の変遷をたどる（図11）。居住域の東には、土器棺墓と土壙墓群が多数群在し、墓域を形成する。土器棺墓には遠賀川系土器が数多く使用されている。この集落は、雄物川下流域の晩期最終末の在地集団が西日本の農耕集団との緊密な交流のもとに、成立したものであり、墓域における搬入型とみられる遠賀川系土器の埋設はその関係をよく裏づけている。水田や木製農耕具の検出がこの地域で期待される。

奥羽山系の東部では、岩手県滝沢村湯舟沢遺跡において晩期終末から弥生時代中期前半にかけての集落が明らかにされている（桐生1986）。この遺跡は、北上川上流域の右岸丘陵地にある。この集落は、弥生前期後半の2期から中期前半の3期にかけて最も活発な様相をみせており、4、5棟の大型住居で集落が構成されている（図12）。集落を取り囲む施設はみられない。また、墓域も確認されていない。

この遺跡の竪穴住居跡からは、多量の山王Ⅲ層式期の遺物が出土しており、この地域の前期後半の生活様式がよく捉えられる。土器の器種のセットは、甕と粗製蓋、高杯と鉢、壺と蓋で構成される。また、その装飾は晩期終末の装飾意匠を受け継ぎ独特の体系が展開している。その器種構成と装飾体系は、北上川水系の中神遺跡（須藤他1997）や迫川流域の山王廻遺跡出土資料（須藤1983）と共に、強い地域色を示している。この弥生土器型式（図13）は、ひろく北上川流域、北上山系に分布し、また、日本海側にも搬入され、東北地方では最も広い土器型式の分布圏を確立する。

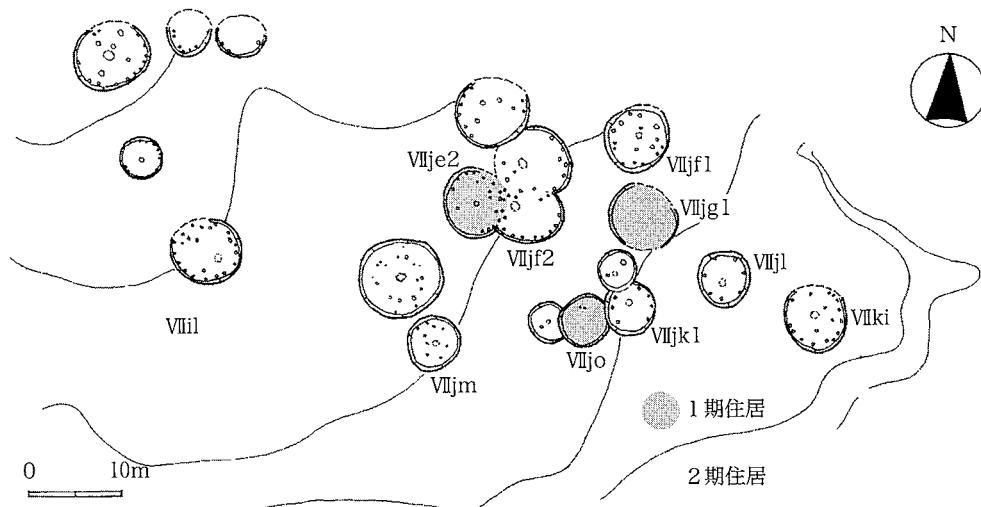


図12 岩手県滝沢村湯舟沢遺跡の弥生時代前期後半住居群変遷

宮城県栗原郡一迫町山王団遺跡では、1995年から1999年の5年間の発掘調査（須藤他1995、96）によって、晩期中葉から弥生時代前期にかけての集落の変遷が明らかにされている（図14）。遺跡の立地する東西240m、南北180m程の自然堤防には、そのほぼ中央で南西から北東にかけて幅20m程の河道がのびていることが明らかにされている。また、東の微高地にはその南よりに河道から140mにわたって濠（図15）が掘削され、前期の集落を区画している。溝の幅は1.5m、深さは1mを超す断面V字の溝で、東北では、はじめて区画溝をもつ弥生集落が明らかにされた（須藤他1995、96、97、98、須藤1997、98）。

また、この遺跡では、晩期最終末6期の低湿地堆積層から小型豎杵1点（図16）が出土した。この杵は、先端が激しく使用され、丸く使い込まれている。径7cm程の丸木を樹皮のついたまま使用している。芯材がそのまま用いられており、中在家南遺跡出土の弥生時代の豎杵（工藤他1997）とは異質である。しかし、先端の使用痕が顕著で、残存している樹皮



図14 山王団遺跡弥生前期の豎穴住居跡

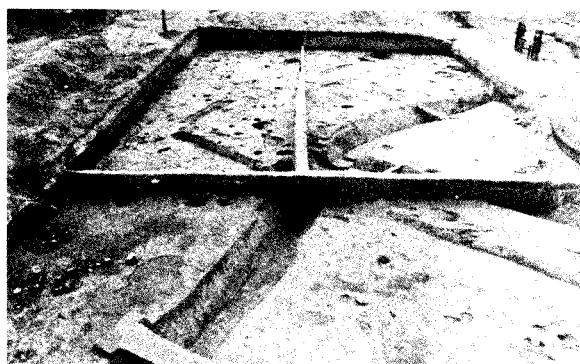


図15 山王団遺跡の弥生前期V字溝

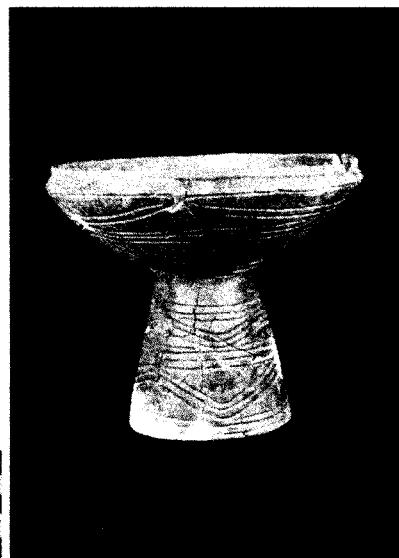


図13 岩手県岩手町乙茂内遺跡出土
山王III層式高杯



図16 山王団遺跡晩期5c期包含層
出土豎杵

には使用痕がみられないことから、堅杵と判断される。東北地方では最古の堅杵といえる。

中期中葉から後半の集落については、全体構造が捉えられる調査資料はない。仙台市南小泉や中在家南遺跡では、まだ弥生集落中枢部の調査は取り組まれていない。中期、後期遺跡の包含層のあり方、遺跡密度、水田、水路跡の広がり、あるいは名取市原遺跡、福島県天神原、一ノ堰B遺跡などで明らかにされた墓域の構成から、中期集落の規模や構造を推定するに留まっている。

現在のところ、富沢、中在家南、垂柳遺跡などでは湯舟沢遺跡の集落とほぼ同じ程度の規模の集落が営まれていたと推定される。登呂遺跡の後期集落のように、4棟、2棟程の住居がいくつかのグループになって散在する集落景観が予想される。関東地方では、横浜市大塚遺跡の中期中頃、宮ノ台式期環濠集落のように1時期に30棟近い住居が営まれ、累積して110棟を超す住居跡が残された集落がみられるが、東北地方ではこのクラスの規模の集落はまだ知られていない。今後、中期、後期集落の解明が強く期待される。

5. 弥生時代の墓制

a. 墓制の地域性

東北地方の弥生時代の墓制は、前期から中期の変遷が明らかにされている。先に触れた地蔵田B遺跡では、約25基の土器棺墓と51基の土壙墓が検出されている。この組み合わせの埋葬形態が前期墓制の基本的型式のひとつである。土器棺は、高さ50cm前後の大型壺を使用している。合せ口土器棺が一般的である。すでにふれた二戸市金田一川遺跡の合わせ口土器棺は、成人骨が出土している（亀沢1958）。この土器棺墓は、二次葬の可能性もあるが、今後の検討が必要である。

東北部や中部では、1939、1940年に調査された南小泉の13組みの合せ口土器棺墓、1957年に調査された仙台市西台畠遺跡出土土器棺墓（伊藤1958）、1995年に調査された名取市原遺跡の壺棺墓群にみられるように、中期には一層土器棺墓が発達する。ことに原遺跡では中期前半の土器棺墓を主体とする墓域の実態が明らかにされた（註1）。また、これと並行して中在家南（工藤他 前掲）、仙台市下ノ内浦遺跡（吉岡他1996）などでは、中期に土壙墓も盛んに営まれている。

さらに、この土器棺墓は、郡山市柏山、福良沢遺跡、水沢市常盤遺跡や古川市宮沢遺跡（宮城県教育委員会1980）などのように、中期後半から後期にかけて引き続き営まれており、その葬制の伝統が弥生時代後期まで生き続けていたといえる。

b. 再葬墓

東北地方南部では再葬墓が発達する。その分布は、最上川下流域、阿武隈川下流域から西は中部高地、東海地方東部におよぶ（須藤1998）。この再葬墓は、晩期後半の大洞A式期の新段階に浮線文土器と亀ヶ岡土器分布圏との重なりあう地域である東北南部で出現した地域色の強い葬制である。中期前半で最も盛行する。会津若松市墓料遺跡（図17、須藤他1984）や福島県靈山町根古屋遺跡（梅宮・大竹1986）などで知られるように、高さ40～70cmの大型壺を納骨土器として使用し、土壙に一括して納骨土器を収める二次埋葬である。埋設される土器は、最大で15個、平均4個である。合わせ口土器もみられる。底部には穿孔はみられず、南小泉、原、地蔵田B遺跡などの土器棺墓とは相違がある。根古屋遺跡では、環状あるいは弧状に土器埋設土壙が展開する。環状の納骨土器埋設パターンの内側に、遠賀川系土器3点を一括埋設した2号土壙が単独で設けられている。このように再葬墓の墓域にはある程度共通した構造がみられる。また、まれではあるが人面土器、土偶型容器のようなきわめて特殊な土器が共伴する。再葬墓における祭祀的側面をよく示す土器である。

この葬制は、中期の中頃にはみられなくなる。そして、中期中葉から後半になると会津若松市一ノ堰B遺跡（図18）検出の112基の土壙墓群や、福島県双葉郡楢葉町天神原遺跡出土の土壙墓47基、土器棺墓24基のよう



図17 会津若松市墓料遺跡11号再葬墓



図18 会津若松市一ノ堰B遺跡における土壙墓群検出状況

に、土器棺墓、土壙墓が盛行する。

東北南部の墓制も、このように中期後半には東北中部と共に通した埋葬形態が普及する。弥生時代中、後期の土器棺墓については、成人墓—再葬墓—、伝統的な小児棺墓のいづれかその性格の検証は今後の課題である。さらに、近年、会津地方など東北南部では後期の方形周溝墓が確認され、この時期になって葬制に大きな変化が生じたことが明らかになってしまっている。

6. 水田跡と木製農具

a. 東北地方南半

次に、東北地方における弥生時代初期農耕について考えてみたい。東北地方の考古学では、最近の重要な成果のひとつに大規模な水田跡の組織的調査をあげることができる。

仙台市の富沢遺跡では水田跡（図19）の徹底した調査の積み重ねで、東西1km、南北ほぼ1kmにおよぶ広い範囲で、弥生水田の広がりが明らかになってきている。また、中期前半から後期にかけてのおよそ400年間に水田が営みつけられ、しかもその水田が繰り返し洪水によって埋没している。精緻な調査で層位的に重なり合った各時期の水田跡が明らかにされている。

名取川左岸の自然堤防にある高田B遺跡では、中期中頃の弥生水田跡が発見されている（宮城県教育委員会1996）。後背湿地性低地と自然堤防の緩斜面に水路と水田が営まれ、水田の規模は15～25m²で、比較的小規模なものが整然とひろがっている。この高田B遺跡や富沢遺跡、中在家南遺跡では、湿田で用いられる様々な木製農具が出土している。ここに中在家南遺跡では、この地域の弥生農具の器種構成、製作技術が把握できる豊富な資料が出土している。

農具としては鍬—幅の広い広鍬と幅の狭い狭鍬、これとセットになる泥除け（図20）、掘り棒、豆殻などの脱穀に用いられる「たたき棒」、臼と堅杵、多様な未成品が豊富に出土し



図19 仙台市富沢水田遺跡の小区画水田跡



図20 富沢遺跡出土泥除け

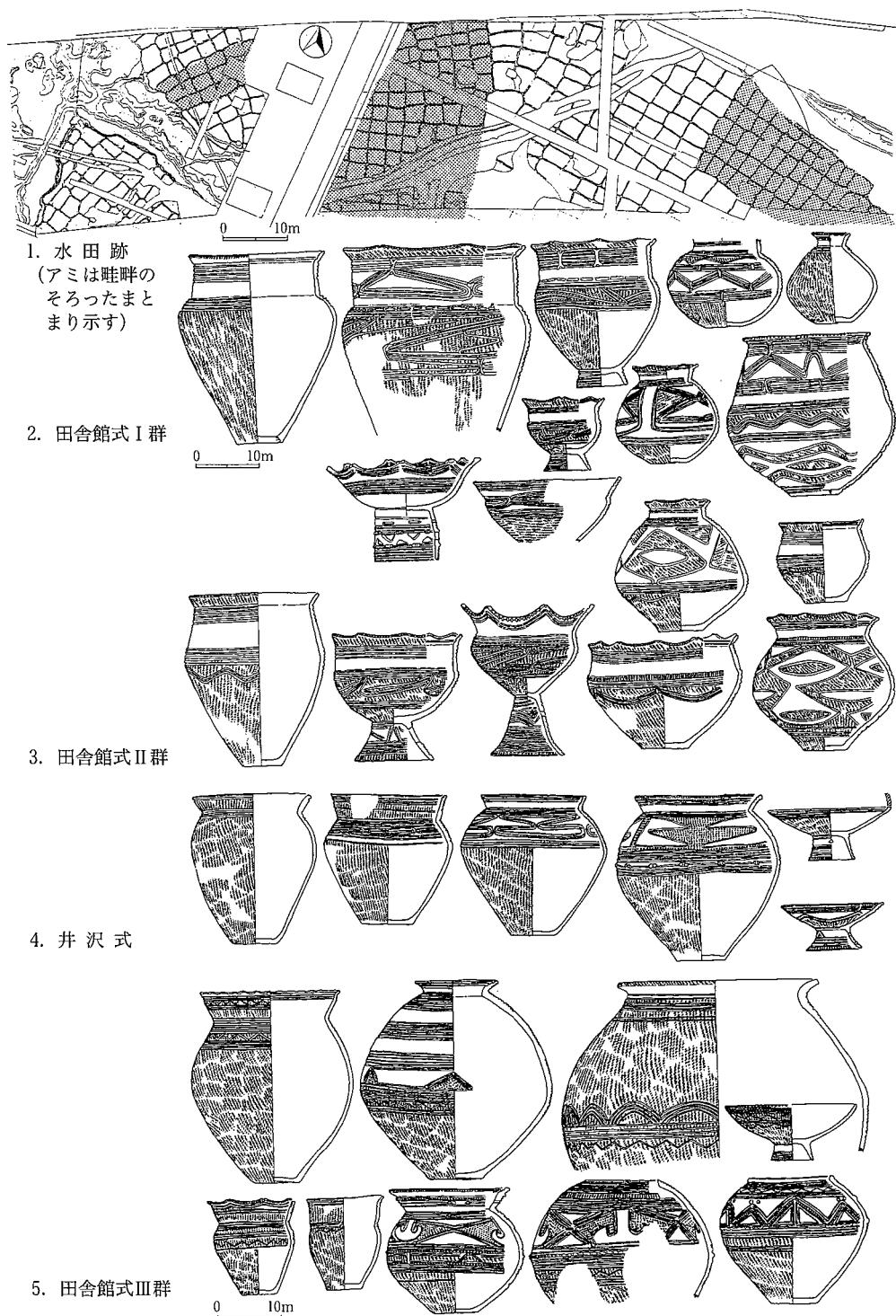


図21 青森県南津軽郡田舎館村垂柳遺跡の水田跡と出土遺跡

ている。鍬、鋤はクヌギが用いられており、広鍬には装飾的な突起が飾られたものもあり、強い地域色を抱えている。

南小泉、高田B、中在家南遺跡などでは、東北中部の代表的な中期弥生土器である榠形圍式土器が出土する。その器形のセットと装飾は、仙台平野、相馬海岸で強い齊一性をみせる。装飾性が高く、地域色の強い弥生土器である。器種は煮沸用甕と粗製蓋、装飾的な高杯、鉢、壺、大型壺とその蓋がみられる。壺には高さ50cmを超す大型壺が出現しており、貯蔵用の土器が発達する。このような土器の構成は、まさに農耕民の土器ということができる。

b. 田舎館遺跡の水田と木製農具

青森県垂柳遺跡は、津軽平野のほぼ中央、黒石市の東にあり、岩木川上流、八甲田山に水源をもつ浅瀬石川の南岸にのびる標高30m前後の自然堤防にある。1982年から1984年に調査が行われ、3万m²の調査地で656枚、3967m²の水田が確認された。水田の広がりは、南北1km、東西800mにおよぶ。水田の面積は1～22m²あり、なかでも5～10m²のものが多く、畦が整然と連なり、30m四方程度のまとまりがいくつかのブロックでみられる。その後の範囲確認調査で、東西、南北ともに1km程の広がりをもつことが明らかにされている（図21-1）。

出土土器は、3型式みられ、3期の井沢式（同図4）と字鉄II式（同図2）、4期の田舎館2・3群土器（同図3、5）が主体になる。土器型式からこの水田が中期前半から中頃にかけて営まれたと推定される。水田と水路は極めて企画性をもって造営されており、畦は碁盤の目のように通っている。30m四方前後のまとまりが、耕作の基本単位と考えられる。さらにそれを全体として統合したまとまり



図22 青森県垂柳遺跡出土南御山II式土器

がみられ、その1km四方におよぶ範囲の水田を造営した集団がこの地方の農耕集団の構成単位となる。このような弥生水田は、どのような農耕集団によって営まれたのか、今後、解明すべき重要な課題である。

田舎館式土器は、東北地方北部の代表的な弥生土器であり、極めて地域色が強く、かつて、「続縄文土器」と呼ばれた土器群である。田舎館式1群から2群土器への系統と、井沢式から田舎館式3群土器への系統と、2つの系統が共存していると考えられる。装飾では充填縄文手法が発達し、東北地方南半部の土器作りと連動した展開がみられる。1996年の遺跡西南部の調査で、溝から南御山II式の壺（図22）が出土しており、遠隔地間での活発な交流がうかがえる。

また、木製品では、斧柄、ヒシャク、火讚臼といった遺物もこれまでの調査で出土しているが、狭鋤が出土している。鋤は、これまでに2点出土しており、舟形突起をもち、富沢の狭鋤と共に通する。石庖丁は出土していない。奈良県唐古遺跡などで出土する本製の穂摘具が使用されていた可能性も考えられる。弥生農耕技術、弥生文化が東北北部の津軽平野にも確実に及んでいたことを知ることができる。西日本の農耕文化が、北陸や近畿地方のどの地域を本貫地として、また、日本海沿岸をどのように北上し、どのように受容されたのか、今後、その内容がより明確に解明する必要がある。

c. 伝統的文化要素

新たな文化変容の展開とともに、伝統的要素も多数生き続け、東北地方の弥生文化の地域色を鮮明にしている。弥生土偶は、その典型的な文化要素である。垂柳遺跡では、発掘調査品も含め、5点の土偶が知られている。前期の砂沢遺跡では85点の特徴的な土偶が出土している。また、2期の瀬野、二枚橋、宇鉄遺跡（図23）でもそれぞれ1点ずつの土偶が出土している。二枚橋遺跡では土版も出土しており、縄文文化の伝統が根強く生き続けていることがうかがえ

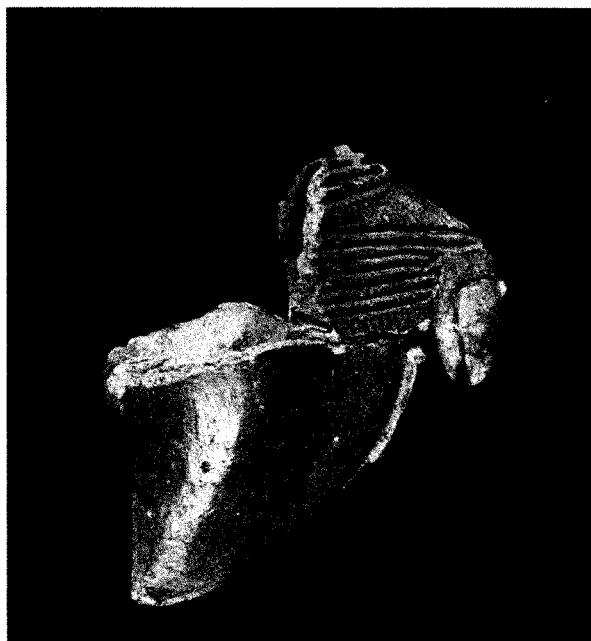


図23 青森県三厩村宇鉄遺跡出土中空土偶(弥生時代前期)

る。このような文物の出土は、東北地方の中、南部でも同様に認められる。宮城県南小泉、岩手県中神、山王廻、青木畠では前期の土偶、福島県の毛萱遺跡では中期後半の土偶が出土している。前期から中期後半までの弥生土偶は、東北地方弥生文化の特色といえる。

d. 石庖丁

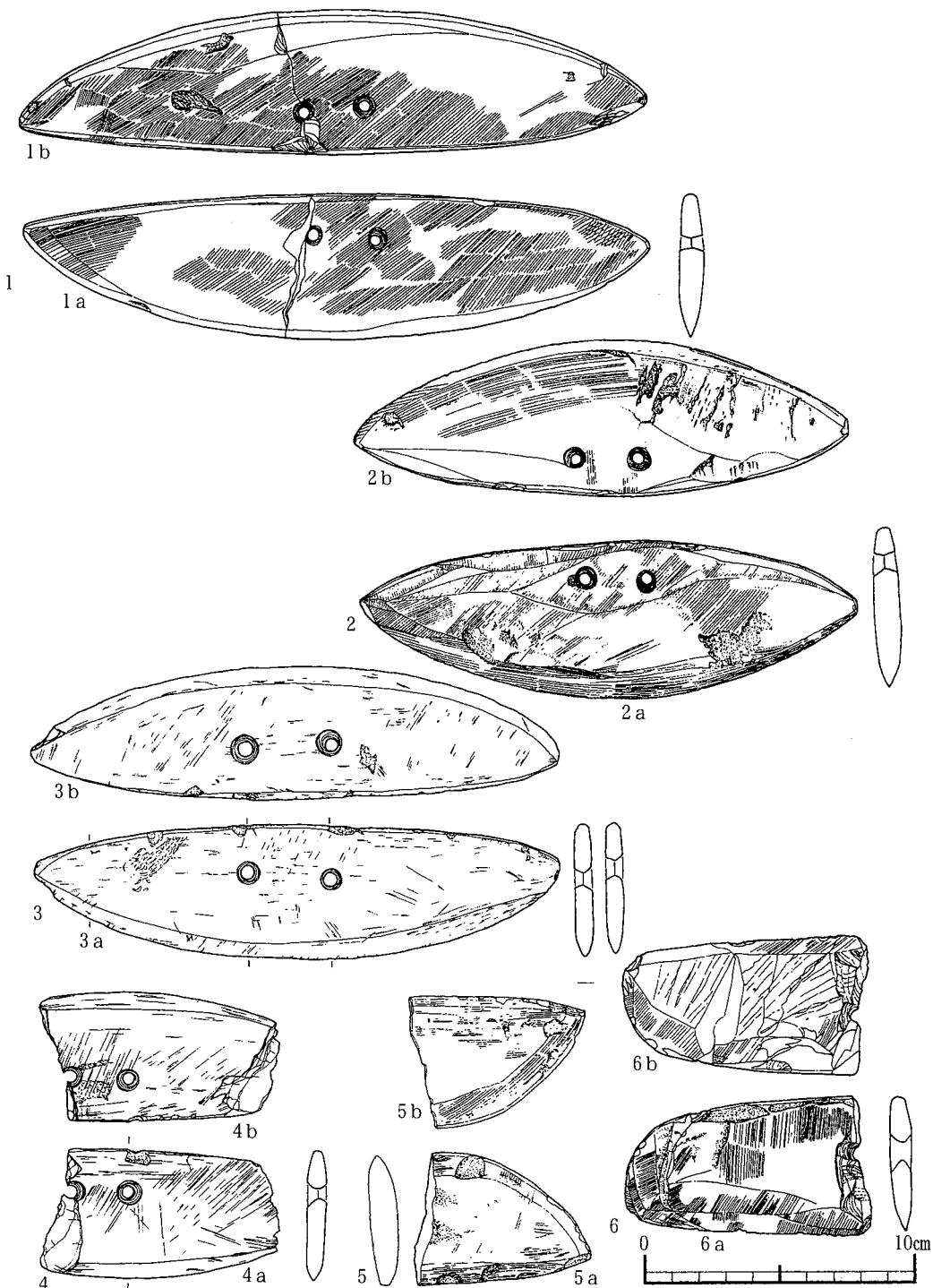
東北地方の南部と中部には多数の弥生石器が出土している。最近、土壌墓に副葬された弥生石器の資料が増えてきている。仙台市下ノ内浦遺跡では、長さ2.8m、幅1.2m、深さ20cmの浅い土壌墓から、蛤刃石斧1点、石庖丁2点、アメリカ式石鎌2、石鎌2、尖頭器1点が一括で出土した（吉岡他前掲）。この土壌墓は、中期後半と推定され、その副葬品の器種構成から成人の男性の埋葬墓とみられる。2点の石庖丁は、顕微鏡で使用痕を観察した結果、刃部が研ぎ込まれてよく調整されていること明らかにされており、水稻栽培、収穫の農耕作業に男性の労働が積極的に投入されていたことが知られる。

下ノ内浦遺跡出土の石庖丁は、ほぼ直線的な背部と外湾する刃部をもち、中央部背よりに2孔をもつ。中期前半から、このような紡錘形の石庖丁が、仙台平野、相馬・いわき海岸地方、阿武隈川流域、最上川流域など、東北地方の中、南部で発達する。ことに仙台平野と福島県の浜通りに多数の石庖丁が分布している。

石庖丁の分布の北限は、秋田市四ツ小屋（図24-3）、秋田県内岱（同図4）、北上平野の胆沢町清水下遺跡（同図1）、水沢市胆沢城跡出土資料（同図2）である。その資料数は、現在、248遺跡、確認された石庖丁は、552点に達している。その型式は、基本的に4タイプがみられる。原遺跡（大友他1997）、船渡前遺跡出土資料のように中期前半に盛行する類型は幅広で、背が直線的、刃部が強く外湾する。次は、中期中頃に爆発的に発達する類型（同図1、2）で、背部が直線的、あるいは緩やかに外湾し、刃部が外湾する紡錘形の石包丁である。この石庖丁の類型は、西日本では北九州と共通する。

この他に後期の石包丁が少数知られている。この時期の石庖丁は、両端が丸みをもち、長楕円形で鰹節のような形をとる。紐孔の間隔がやや広くなっている。これらの石庖丁の素材については、多数の石庖丁を出土した相馬郡鹿島町天神沢、原町桜井遺跡などの資料を検討すると、阿武隈山系の粘板岩、硬砂岩が主に使用されていると考えられる。しかし、北上平野の清水下遺跡のものなどは、北上山系の古生代、中生代の粘板岩が使用された可能性も考えられる。

第4番目の類型は、秋田市四ツ小屋と小坂町内岱出土の石庖丁である。その形態は、東北地方の南半部、太平洋側に分布する類型と全く異なっており、刃部は片刃、直線刃であり、外湾背をもつ。この型式は、東北では珍しく、近畿地方に一般的にみられるタイプで



1 宮城・清水 2、3 岩手県・清水下遺跡 4 岩手・胆沢城 5 秋田・小阿地 6 秋田・内岱

図24 東北地方の石庖丁

ある。この地域と近畿、北陸地方との交流関係の緊密さを示唆している。

このような石庖丁の分布のあり方、型式の違いから太平洋側と日本海側の弥生石器など、文物の導入、受容の構造が著しい相違をもつものであることが明確になった。

7. まとめと今後の課題

弥生時代の東北の特色を次のように捉えられる。

- (1) 弥生前期には、西日本からの新たな文化要素の導入によって、確実に、生業活動の変化、社会変化、文化変化が進んでいる。
- (2) 一方で、この地方は、縄文社会、文化からの伝統が根強く生きづけている。ことに土器作り－供獻用の裝飾土器の裝飾－、住居構造、墓制（再葬墓、小児土器棺墓）、土偶、打製石器の製作技術などによく受け継がれている。
- (3) 弥生文化の地域性は縄文時代の地域的関係、遠隔地まで複雑に結び付いた交流関係が基礎となっている。土器の型式変異と変化にその交流関係がよく表われている。
- (4) 中期前半に農耕社会は着実に発展する。そして、中頃にその発展の頂点に達する。また、この時期に地域色豊かな弥生文化が確立する。東北地方の南と北、東と西の地域色が最も顕在化するのは、この時期である。
- (5) 集落構造は縄文時代からの伝統が強く、前期には山王廻、地蔵田B遺跡などをのぞくと特に大きな相違はみられない。しかし、中期前半には農耕社会が確立する。富沢遺跡や垂柳遺跡の水田、水路の跡にはその発展の動向がうかがえる。この時期の弥生土器、石庖丁や蛤刃石斧、木製農具の発達もそれを裏づけている。
- (6) 後期には土器型式の齊一化が進む。天王山式土器が北海道や、北陸において出土しており、その文化的高揚がうかがえる。
- (7) 東北地方の弥生墓制は、前期から中期後半にかけて、南部と中部以北で明確な地域差がみられる。中期中頃からはその地域差が消滅するとみられる。
- (8) 中神遺跡や、中在家南遺跡の石器、動物遺存体の最近の研究から、弥生時代の狩猟漁労活動は、縄文晚期の狩猟活動と同じように著しく活発であったとみられる。

最後に、東北地方の弥生研究では、なお、次のような解明すべき課題を多数抱えている。

- (1) 稲作農耕とその文化の受容は縄文時代のいつ頃までさかのぼるのか。東北地方では、晩期6期には、遠賀川系土器、小型豎杵、栽培植物などの受容が進んでいる。縄文晚期の農耕、植物資源利用の実態について、今後明らかにしていかなければならない。
- (2) また、中期から後期の弥生社会、文化はどのように展開するのか、その解明が、大きな課題である。後期の編年については、いわき、相馬地方で関東地方との関係を視野に

いれた、細やかな型式変遷が捉えられているが、仙台以北については文化変遷、編年の解明は、今後の課題である。この時期の文化、社会の充分な理解があつて始めて後続する古墳時代の文化、社会の理解が可能であるといえる。今後の研究の進展が期待される。

本論文は、1998年度宮城県考古学会総会の講演原稿に手を加えたものである。

(註1) 名取市教育委員会の恵美昌之・大友透氏の御好意によって原遺跡出土資料について実見する機会を得た。

引用文献

- 安部 実 1986 「生石2遺跡発掘調査報告書(2)」『山形県埋蔵文化財調査報告書』99
- 伊藤玄三 1965 「仙台市西台畠出土の弥生式土器」『考古学雑誌』44-1 pp.11~28
- 伊東信雄 1950 a 「東北地方の弥生式文化」『文化』2-4 pp.40~64
- 伊東信雄 1950 b 「南小泉石器時代遺跡」『仙台市史』3 別編1 pp.13~31
- 伊東信雄 1954 「岩手県佐倉河村発見の弥生遺跡」『古代学』III-2 pp.1~11
- 伊東信雄 1955 「東北」『日本考古学講座』4 pp.112~118
- 伊東信雄 1957 「弥生式文化時代」『宮城県史』1 pp.52~70
- 伊東信雄 1960 「東北北部の弥生式土器」『文化』24-1 pp.17~45
- 伊東信雄・須藤 隆 1985 『山王廻遺跡調査図録』(宮城県一迫町教育委員会)
- 伊東信雄・須藤 隆 1982 『瀬野遺跡－青森県下北郡脇野沢村瀬野遺跡の研究－』(東北考古学会)
- 伊東信雄・須藤 隆他 1971 『郡山市福良沢遺跡発掘調査報告書』(福島県郡山市教育委員会)
- 伊東信雄・須藤 隆他 1972 『郡山市柏山遺跡発掘調査報告書』(福島県郡山市教育委員会)
- 梅宮 茂・大竹憲二 1982 『靈山・根古屋遺跡』
- 大友 透・福山宗志 1997 「原遺跡」『名取市文化財調査報告書』38
- 亀沢 磐 1958 「福岡町金田一川遺跡」『岩手史学研究』29 pp.58~62
- 桐生正一他 1986 「湯舟沢遺跡」『滝沢村文化財調査報告書』2
- 工藤竹久・滝沢幸長 1984 『剣吉荒町遺跡発掘調査報告書』(名川町教育委員会)
- 工藤哲司他 1997 「中在家南遺跡」『仙台市文化財調査報告書』213
- 後藤 郭・小宮恒雄・坂上克弘・武井則道・宮沢 寛 1991 「大塚遺跡」『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X II』
- 後藤守一他 1958 『登呂』後編(日本考古学協会)
- 小林行雄 1938 『弥生式土器聚成 正編解説』
- 小林行雄 1934 「一つの伝播変移現象－遠賀川系土器の場合－」『考古学』5-1 pp.9~16
- 駒井和愛・杉原莊介他 1958 『登呂遺跡』前編(日本考古学協会)
- 小村田達也・三好秀樹他 1993 「北原遺跡」『宮城県文化財調査報告書』159
- 佐原 真 1968 「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2 pp.53~72
- 柴田俊彰他 1998 『鳥内遺跡』(石川町教育委員会)
- 清水芳弘 1988 「人が動き土器も動く」『季刊考古学』19 pp.30~33
- 菅原俊行他 1986 『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－地蔵田B遺跡－』

(秋田市教育委員会)

- 須藤 隆 1970 「青森県大畠町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』56-2 pp.10~65
- 須藤 隆 1983 「東北地方の初期弥生土器－山王Ⅲ層式－」『考古学雑誌』68-3 pp.1~53
- 須藤 隆 1987 「東日本における弥生文化の受容」『考古学雑誌』73-1 pp.1~43
- 須藤 隆 1997 「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』89 pp.44~82
- 須藤 隆 1998 『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』(纂修堂)
- 須藤 隆・大場亜弥他 1995 『山王廻遺跡発掘調査報告書』I (一迫町教育委員会)
- 須藤 隆・大場亜弥他 1996 『山王廻遺跡発掘調査報告書』II
- 須藤 隆編 1984 『福島県会津若松市墓料遺跡－1980年度発掘調査報告書－』(会津若松市教育委員会)
- 須藤 隆他 1997 『中神遺跡の調査』(岩手県花泉町教育委員会)
- 須藤 隆他 1999 『岩手県足沢遺跡資料』『奈良国立文化財研究所史料』50
- 芹沢長介 1958 「縄文土器」『世界陶磁全集』I pp.159~174 (平凡社)
- 田鎖寿夫・斎藤邦雄他 1995 「大日向II遺跡調査報告書」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』225
- 中村五郎他 1998 「荒屋敷遺跡」II 『三島町文化財調査報告書』10
- 新山隆男他 1997 「垂柳遺跡・五輪野遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書』219
- 長谷部言人 1925 「陸前大洞貝塚(発掘)調査所見」『人類学雑誌』40-10 pp.349~360
- 藤沢一夫・小林行雄 1934 「尾張西志賀の遠賀川系土器」『考古学』5-2 pp.44~50
- 真山 悟・斎藤吉弘他 1980 「古川市宮沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』III
- 三橋憲一・木村鉄次郎・水谷和憲 1997 「畠内遺跡」IV 『青森県埋蔵文化財調査報告書』211
- 宮城県教育委員会 1980 「宮沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』69 pp.3~261
- 宮城県教育委員会 1985 「今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚」『宮城県文化財調査報告書』104
- 宮城県教育委員会 1996 「高田B遺跡」『宮城県文化財調査報告書』260
- 村越 潔他 1991 『砂沢遺跡発掘調査報告書』(弘前市教育委員会)
- 村田晃一・後藤秀一 1994 「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』163
- 山内清男 1925 「石器時代にも稻あり」『人類学雑誌』40-5 pp.181~184
- 吉岡恭平他 1996 「下ノ内浦・山口遺跡」『仙台市文化財調査報告書』207
- (2000年3月4日原稿提出)